

## 被災地支援活動の経験を生かした心のケアを中心とする防災教育推進の取組

香美町立射添小学校  
教諭 村尾 克彦

### 1 取組の内容・方法

兵庫県の教員となり10年の節目を機に、平成24年度から震災・学校支援チーム（EARTH）（以下、EARTHという。）の一員としての活動に取り組んできた。「自然災害から自らの命を守り、共に協力して助け合おう」とする児童生徒の育成に向け、被災地での支援活動並びに、地域での防災教育の推進に努めてきた。

#### （1）被災地での復興支援活動

EARTHの一員として、平成25年の宮城県への派遣以降、災害被災地での復興支援活動に携わってきた。（写真1、写真2）

- ・平成25年8月20日～22日 宮城県石巻市、南三陸町（小・中学校支援）
- ・平成26年8月20日～22日 宮城県石巻市、気仙沼市、東松島市（防災教育研修会での助言）
- ・平成30年7月25日～27日 岡山県倉敷市（小学校避難所運営支援）
- ・平成30年7月30日～31日 岡山県倉敷市（小学校避難所運営支援）
- ・平成30年8月30日 岡山県倉敷市（教職員を対象とした学校再開並びに心のケア研修会講師）
- ・平成30年9月26日 岡山県倉敷市（避難所3小学校の管理職に対する学校運営支援）
- ・令和元年7月31日～8月3日 宮城県仙台市（現地教職員研修会での助言）

#### （2）「命を守る」防災授業

EARTHの活動として、県内の小・中学校等の要請に応じて、児童生徒を対象に「阪神淡路大震災から学ぶもの」「今後起きるであろう大規模災害から自分の命を守るために」等の内容で防災教育としての授業を行ってきた。

また、教職員を対象としては、「児童生徒への心のケア研修」を中心とした災害対策等のアドバイスを行ってきた。

写真1 派遣先での防災授業の様子



#### （3）兵庫県防災教育副読本「明日に生きる」の活用

兵庫県防災教育副読本「明日に生きる」を防災教育に効果的に活用する方途について、防災教育専門推進員と連携を取りながら、指導案の作成等に取り組んできた。

## 2 取組の成果

- (1) 被災地での復興支援活動に携わる中で、自らの防災に対する知識を深めることができた。特に、学校の支援活動では、児童生徒の心のケアの重要性を再認識し、その後の防災教育に取り組む上での自身の重要な柱となり、EARTH員としての活動においても、教職員を対象とした「児童生徒への心のケア研修」を中心に、災害対策等のアドバイスをを行っている。
- (2) 勤務校においては、1.17追悼集会を中心に毎年「命を守る防災授業」を行っている。子どもたちの感想には、「自分で命を守ること、自助・共助・公助の自助が大切なんだとわかりました。」とあるように、防災意識の高まりを感じることができた。
- (3) 平成30年11月26日 但馬地区防災教育修会にて、2年生活科「1年生をむかえよう『校案内をしよう』(あすにいきる(改訂版)「いのちをまもるものをさがしにいこう」P14.15)の模擬授業を行い、「明日に生きる」の効果的な活用法について提案を行なうことができた。なお、作成した指導案については、兵庫県教育委員会教育企画課のホームページ及び防災教育授業実践例として掲載されている。

写真2 宮城県での研修会講師



## 3 課題及び今後の取組の方向

阪神淡路大震災から25年、EARTH発足から20年目を向かえ、令和元年度には、220名を超えるEARTH員が兵庫県内の各地区、各校種に配置されている。そして、大規模災害発生時の支援に備えるだけでなく、「兵庫の防災教育」の発展に向け、日々実践と研修を行っている。

近年、日本各地で頻発している異常気象による豪雨災害や地震などにより、県外からEARTHへの要請頻度は高くなってきていると感じる。その要請のすべてに応えていくため、本年度は60名ほどのEARTH員が増員された。

しかし、EARTH員の世代交代も近年激しく、EARTH発足時のメンバーや、阪神淡路大震災時に避難所運営に関わった教職員、復興担当教員経験者等、実際に教職員として大規模災害を経験したメンバーは大変少なくなっている現状がある。私も、EARTH員として任命されてから8年目が過ぎ、現在活動しているEARTH員の中では中堅的な存在となっている。

そこで今、一番の課題として感じていることは、阪神淡路大震災を教職員として経験していない、また、災害時の避難所運営等を経験していない若手のEARTH員が、被災地からの派遣要請に応じ被災地支援活動にあたる際に、「被災地支援の経験がない自分にできるだろうか。」と不安を抱えているということである。兵庫県立教育研修所が実施している防災教育推進指導員養成講座を修了していても、実際の被災地において、今どんな支援が必要なのかということ判断し、実践していくことは容易ではない。それら

支援活動を行っていくためには、知識とともに経験が重要であると思うからである。

今、私に求められていることは、自分が経験してきた被災地支援のノウハウを、若手 EARTH員に平時から詳細に伝え、いつ起こるかわからない次の災害に備えておくこと、また、被災地の写真や、研修で使った講義資料、防災授業の資料など、自分が持ち得ているデータ等を共有化し、若手の力量向上に努めることであると感じている。自身の被災体験や被災地支援活動の経験の有無に関わらず、EARTH員全員が自信を持って活動ができるよう、今後も「ひょうごの防災教育」の発展のため、自分にできる取組に努めていきたいと思う。